

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

令和 4 年 10 月 4 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 生存圏研究所

職 名 教授

氏 名 山本 衛

助成の種類	令和 4 年度 ・ 国際会議開催助成		
国際会議名	第16回赤道超高層大気国際シンポジウム 16th International Symposium on Equatorial Aeronomy (ISEA-16)		
開催期間	令和 4 年 9 月 12 日 ～ 令和 4 年 9 月 16 日		
開催場所	京都大学宇治キャンパスおうばくプラザ / zoom ハイブリッド		
参加者	総数 133	内 訳 現地参加 70名、うち海外機関44名 zoom参加 63名、うち海外機関59名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	事業に要した経費総額	6,592,694 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	情報通信研究機構国際研究会開催支援、地球電磁気・地球惑星圏学会国際学術研究会補助、京都大学生存圏研究所研究会、名古屋大学宇宙地球環境研究所研究会、日本学術振興会研究拠点形成事業B.アジア・アフリカ学術基盤形成型	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	海外研究者招へい旅費	4,871,363	1,000,000
	会議費	431,200	
	消耗品費	296,432	
	通信費	679,307	
印刷費	31,680		
謝金	158,725		
飲食費	123,987		
合 計	6,592,694	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回の助成金は、全て海外研究者の招へい旅費として利用致しました。コロナ禍と急激な円安の影響で航空券が高騰しており、招へいできる研究者の数をかなり抑える必要に迫られていましたが、今回の助成のおかげで当初予定していた方の招へいが可能となりました。海外からの現地参加者は、自費での参加者も含めて44名にのぼり、シンポジウムは成功裏に終了することができました。今後も機会があれば利用させて頂きたいと考えております。		

2022年9月12日から16日にかけて、第16回赤道超高層大気国際シンポジウム (International Symposium on Equatorial Aeronomy; 以下 ISEA-16) を開催した。京都大学宇治キャンパスおうばくプラザでの現地開催と zoom によるハイブリッド開催として実施し、現地参加者 70 名 (うち海外からの参加者 44 名)、zoom によるオンライン参加者 63 名 (うち海外からの参加者 59 名) と、徐々に進められた入国制限の緩和と、開催直前の陰性証明掲示の撤廃も相まって、非常に盛況なシンポジウムとなった。

ISEA は、3-4 年に 1 度各国持ち回りで開催される集会であり、今回で 16 回目の開催であった。第 1 回は Jicamarca レーダーの開設に合わせて 1962 年にペルーで開催されており、今回は 60 年目の節目の開催であり。また、日本国内では初めての開催であった。赤道超高層大気に関する話題を中心に全てシングルセッションで 5 日間開催されるのが伝統であり、今回は 7 つのサイエンスセッションと、初日の Keynote Lecture, 最終日の Closing Lecture でシンポジウムを構成した。セッション一覧は以下の通りである。Session 1: Equatorial E- and F-region irregularities: Cause and effects, Session 2: Longitudinal/hemispheric variation of equatorial electrodynamics, Session 3: Atmosphere-ionosphere vertical coupling at low- and mid-latitudes, Session 4: Space weather effects at low- and mid-latitudes, Session 5: Recent advances in instrumentation and observation, Session 6: Application of numerical techniques for aeronomy, Session 7: Future trends, opportunities, and challenges in low-latitude aeronomy. 初日の Keynote Lecture は京都大学生存圏研究所の海老原祐輔准教授に、最終日の Closing Lecture は NASA ゴダード宇宙飛行センターの Robert Pfaff 博士に行って頂いた。いずれも好評であり、シンポジウムは成功裏に終了した。

大規模な国際学会等はセッションが細分化されているため、特定の話題について集中的に議論を深めることが難しいが、ISEA はシングルセッションによる集会かつ比較的少人数の開催であることが特徴であり、赤道・低緯度域の超高層大気の科学を集中的に取り扱うことで議論が白熱し、終了時刻が大幅に遅れる日もあった。特に、各国から若手・ベテラン研究者がバランス良く出席し、人的交流が大きく促進されたことは非常に大きな成果であったと言える。

